

□ 書 評

国立がんセンター内科部長 崎田隆夫 監修

胃カメラ研修の実際

九州大学医学部第2内科 岡部 治 弥

本書の内容は、大きく二つに分けて、検査法と診断の部よりなっており、診断の部の参考資料として、最初の63頁まで原色写真248枚とその簡潔な説明が付けられている。著者らによる本書のあとがきに、本書をあらわすについての目的が記されている。すなわち、患者の苦痛を最少にして、もっともよい診断ができる胃内視鏡検査に関する著者らの考えや工夫をわかりやすい形でかきたいということである。また序において、本書は国立がんセンター病院発足以来8年の間、多忙の診療、研究のかたわら、孜々として続けられてきた内外の諸学者に対する研修諸講義の集成であるとも記されている。

本書を監修された崎田博士は、その恩師である田坂博士や久留博士の序文にもあるように、胃カメラ改良に心血をそそいだ草分けの1人であり、東大第一内科八研から国立がんセンターに至るまでの10年に近い歳月を、胃カメラ診断学の開拓および

その普及に努めてこられた人であることは、江湖にあまねく知られているところである。それだけに今回同博士とそのスタッフによって完成した本書は、細心の注意のもとに懇切丁寧な説明がなされており、今から初めようと志す人にとって誠に有益な本であるといえる。

本書の検査法の部を読みながら、今では、この本の前身ともいべき田坂博士監修の「胃カメラ——その機械の使用法と臨床応用の実際」をひもといた当時の興奮が10年ぶりによみがえり、一気に読み過ぎてしまった。「胃カメラ——……」はあの当時、この道に入ろうとする人々にとっては、欠くことのできない入門書であったが、その後、10年、その間にファイバースコープの導入もあって、胃カメラの改良進歩は、まさに目まぐるしいものがあり、今や種々の特徴をそなえた多くの機種が絢爛としてその妍を競う状態であり、Kussmaul 以来、一世紀にわたる胃

内視鏡学者の夢はほぼかなえられたともいえる現在、かつての好著「胃カメラ——……」も既に今日的なものでなく、現状に応じた優れた入門書の出現は待望久しいものがあったといえる。その意味においても、本書は十二分にその目的を具現している。初心者のみならず、現在、この道を歩んでいる人々にとっても、胃内視鏡の診断手技が器具の改良進歩、分野の拡大と進むにつれて複雑化してきており、その今日的な診断技術に習熟するのは必ずしも生やさしいものではない。この精細に説明された検査法を一読することは、自己の技術の進歩に多くの示唆を与えてくれるであろう。

次の診断の部は、胃カメラおよびファイバースコープのあゆみと共に発展した本邦の胃内視鏡診断学の現水準を、早期癌を中心として簡潔に要領よく、かつ順序だてて展開しており、その参考資料としてまとめられている原色写真も美麗である。

本書は、この道を志し、また歩んでいる人々にとって必携の書であるといえよう。

B5判 400頁 総アート

原色写真 248 図版 186

定価 13,000円

中外医学社発行